

地域事例-2

芸術都市の新しい挑戦—札幌・モエレ沼公園

札幌市東区にあるモエレ沼公園は、芸術家イサム・ノグチ氏が手がけた最後の作品として、世界的に注目を集めている総合公園です。彫刻家という狭い枠を超え多彩な活動を行った故イサム・ノグチ氏が、その集大成として設計したモエレ沼公園。国の公園事業や治水事業、そして市のごみ埋立事業を効果的に連携させながら、世界的な芸術家の精神を果敢に受け入れた札幌の取り組みについて取材しました。



'88年10月 モエレ沼で設計図を見ながら現地確認と指示をするイサム・ノグチ氏（左から2番目）。右は川村ご夫妻、左は当時の担当者山本氏。



札幌を代表する公園に

モエレ沼公園の造成事業計画は、ゴミ処理場の建設を検討していた清掃事業計画とともに計画されたもので、ゴミ処理場として取得した用地に不燃ゴミや焼却残さを埋め立て、その後でそこを公園にするということでスタートしました。公園予定地には'79年からゴミの埋め立てが開始、'82年から盛土、植栽などの公園基盤造成工事が進められ、'90年まで札幌市で収集された約270万トンのゴミが埋め立てられました。イサム・ノグチ氏が参画するまでに、基盤造成、外周園路、サイクリングロード造成などに着手、モエレ沼をまたぐように内陸部と市街地を結ぶ橋も整備が進んでいました。ゴミが埋め立てられた内陸部を取り囲むように位置するモエレ沼は、豊平川が自然河川として流れていた時代に、洪水や氾濫のためにできた河跡湖と推定されていますが、現在は雁木新川とつながり、国の伏籠川総合治水事業でも一時雨水貯留池にも位置付けられています。公園の敷地面積は、モエレ沼の水面を含む189ha、その中心は内陸部の約100haです。そのなかに、高さ30mの小高い丘のような「プレイマウンテン」、一辺29mのステンレス柱の組み合わせでできた高さ13mの三角錐と芝生で構成された「テトラマウンド」、夏に子供たちの水遊びの場として親しまれている「アクアプラザ」などがあり、これらの部分はすでに開放されています。なかでも花崗岩の階段がピラミッドのように見えるプレイマウンテンは、'33年からイサム・ノグチ氏が長年温めてきた構想が実現したもので、階段の反対側の斜面を登ると、札幌の雄大な景色が眺められる素晴らしいポイント

Sapporo-shi



になっています。

このほかにもモエレ沼公園には冬季利用の拠点となるガラスのアトリウム建築物「ガラスのピラミッド」(’03年完成予定)、さらに「中央噴水」、「モエレ山」など、’05年の全面完成を目指して造成が進められています。

モエレ沼公園は、札幌市の公園のなかでも数少ない水の要素を持つ公園として、また広大な面積を背景に、スケール感ある札幌を代表する公園として成長しているのです。

イサム・ノグチ氏とモエレ沼の出会い

それまでに彫刻だけでなく、舞台美術、商業デザイン、公園の設計など、幅広い活躍をしてきたイサム・ノグチ氏。彼が初めて札幌を訪れたのは、永眠のわずか9ヵ月前、’88年3月でした。イサム・ノグチ氏に事業の参画を求めていた札幌市では、モエレ沼公園のほかに、芸術の森と、現在の札幌市立高等専門学校のキャンパス計画をその事業候補地として考えていました。世界的にも偉大な芸術家へのアプローチでもあったため、当初は多くの作家が作品を設置している芸術の森の野外美術館への出品がもっとも有力との考えもあったようです。しかし、候補地を視察したイサム・ノグチ氏の目に止まったのは、数として付け足したような候補地のモエレ沼公園の計画でした。札幌市環境局緑化推進部造園課環状緑地係の直接担当者としてモエレ沼の視察に同行した当時の山本仁係長（現在は緑の保全課森林保全担当課長）は、「現場はまだごみがどんどん運ばれてきていましたが、すぐにあの空間の魅力を感じ取ったのでしょうか。広がりがあって、湖もある。街も

近い。視察前にこちらから送付してあった航空写真などを見て、すでに心は決まっていたようでした」と言います。しかし、世界中で公共的な仕事をしてきた経験から行政と芸術的活動をともしする困難さも十分にイサム・ノグチ氏は身にしみていたのです。札幌市の提案は魅力的でしたが、本当に自分が携わることができるのか大きく気持ちが揺れていたようです。そんなイサム・ノグチ氏を支えたのが、アーキテクトファイブ建築事務所の川村純一氏と、指折りの邦楽演奏家でありながらイサム・ノグチ氏の秘書役を務めていた夫人の川村京子氏でした。かねてからイサム・ノグチ氏を尊敬していた川村夫妻は、日本で大きな仕事を実現させてあげたいと、献身的に助力し、尽くしてきた経緯があり、このモエレ沼公園の取り組みについても、全面的に協力する姿勢を貫いてきました。

そうした背景もあって、視察のわずか2ヵ月後、モエレ沼公園の設計は、芸術家イサム・ノグチ氏の手によって全体像が描かれ始めたのです。

環状グリーンベルト構想の拠点公園に

当時、札幌市では、市街地を公園や緑地の帯で包み込もうという「夢の環状グリーンベルト構想」が進んでおり、モエレ沼公園もその一つでした。しかし、この構想は「夢の」という言葉通りの存在で、なかなか市民への認知も進まず、思うような事業展開ができずにいた時期でもありました。何か注目を集めて、市民の認知と理解を深めたいと考えていたときに、イサム・ノグチ氏との出会いがあったのです。札幌のような大都市では、大小さまざまな公園が存在します。しかし、総合公園となれば、計画す

る者からしてみれば、少なくとも全市民が年に1、2回は訪れてもらえるような公園にしたいとの思いがあります。森と運河の前田森林公園、花が咲き誇る百合が原公園など、すでに札幌市内にはそれぞれの表情を持つ特徴的な総合公園があります。しかし大都市であればあるほど、多様なニーズに合わせたさまざまなタイプの公園が望まれてきます。また、そのことは今後の公園のあり方を考える上でも重要な課題ともいえます。そういった点では、公園とアートが結び付いたモエレ沼公園は、新しい公園のあり方を提示してくれた先駆けとの評価もできるでしょう。前出の山本氏によれば、「グリーンベルト構想を説明し、札幌市にとってモエレ沼公園が果たす役割をお話しました。イサム・ノグチさんは、モエレ沼公園の社会的意義を理解し、それを意気にかけてくれたのではないのでしょうか。常に自分の仕事の社会的貢献を考えていた方でした」と、回想します。イサム・ノグチ氏は「全体を一つの彫刻とみなした、宇宙の庭になるような公園」を設計しました。それは彫刻の概念を庭園や公園にまで広げ、地球に直接彫り込む彫刻とも考えられ、子供のために公園を造るという、イサム・ノグチ氏の長年の果たせぬ夢でもありました。しかし、公園設計の面から見れば、それは力量が試される場面でもあります。自然の山や森があれば、それを生かしながら残りの空間をどう連携させるかを考えればいいのですが、ゴミ処分場であった土地のため、自然の山や森はまったくなく、おまけに非常に広大な面積です。地形の制約がなく自由な発想ができる分、力がなければまったく無味乾燥な公園が出来上がってしまいます。

時間を惜しむように札幌・モエレ沼公園の設計に当たったイサム・ノグチ氏は、同年の12月30日に

ク財団のショージ・サダオ氏、日本財団の和泉正敏氏をはじめとするイサム・ノグチ氏に薫陶を受けた大勢の人々に支えられ、その遺志を受け継ぎ'05年の全面完成を目指して着々と造成が進められています。モエレ沼公園は、'98年から部分開放され、多くの市民が公園を訪れ、全面完成を前に、グリーンベルト構想の拠点公園として、すっかり定着しています。

市民の理解を深める布石

モエレ沼公園が一部開放される前に、市民への理解を深める大きな役割を果たしたのが、大通公園に設置された巨大な黒いオブジェ「ブラック・スライド・マントラ」です。この作品は、彼がモエレ沼公園設計を承諾した際、直接本人の口から何か自分の彫刻作品をと提案されたものでした。大通公園の改修計画が始まっていたこともあり、札幌市ではその目玉事業にしようと、'92年に大通西8丁目に仮設置、翌年に大通公園の8丁目と9丁目間の道路を遮断し、公園を連続化して現在の位置に移設されました。当時は、交通渋滞への懸念などから道路を遮断することに対して、なかなか理解を得られなかったことも事実。しかし、当初からイサム・ノグチ氏の参画に熱意を傾けていた桂市長の決意も強く、また芸術に造詣の深い地元テレビ局・札幌テレビ放送の伊坂社長（現会長）との出会いによってイサム・ノグチ氏に関するテレビ番組が放送されるなど、側面からの支援もあり、イサム・ノグチの名は全道に知れ渡るとともに、芸術都市・札幌の取り組みが注目を浴びるようになりました。今、大通公園は8丁目と9丁目がつながり安心して憩える素晴らしい空間になっ



ています。公園をつなぐことは、車が中心になりすぎた社会に対して、人と車の関係を考えるきっかけを与えるための、彼なりの警告だったのかもしれない。

イサム・ノグチが札幌に残したもの

モエレ沼公園を進めていく上でもっとも難関だったのは、送電線鉄塔の移設と送電線のルート変更でした。すでに送電線の迂回ルートは決まっていたものの、それではだめだとイサム・ノグチ氏本人から強い指示があり、「できないのなら辞める」とまで言い出してしまったそうです。送電線が国の管理する河川を横断することから北海道開発局の積極的な理解を得るとともに民間私有地を買い上げ、何とか難を切り抜けることができました。この結果を意気揚々とイサム・ノグチ氏に報告した札幌市に対して彼は「私のためではないでしょう。あなたがたのため、市民のためでしょう」と言い、その言葉を聞いて目が覚めた思いがしたとの職員もいます。今ではモエレ沼担当になる職員は、イサム・ノグチ氏に関する知識はもちろん、彼を取り巻くさまざまな情報を積極的に学ぶようになり、知識や人間としての幅を広げるようになったそうです。イサム・ノグチ氏の存在は、職員の意識向上にもつながっているのです。

またこの取り組みは職員だけでなく、芸術家にも大きな刺激を与えたようです。札幌市南区にある石山緑地は、国松明日香氏など地元在住の芸術家たちがモエレ沼公園に触発され、札幌軟石採掘場跡を舞台にデザインした空間で、'97年度の日本造園学会賞も受賞しています。行政がやりたいと思っても作家のやる気がなければこうした取り組みはできませ

ん。そういう意味ではイサム・ノグチ氏が札幌に残したものは、目に見えるものよりも、実はエネルギーや心の豊かさや芸術の意味やこれからの公園のあり方など、目には見えないものの方がはるかに大きいような気がします。

モエレ沼公園を最初に視察したときイサム・ノグチ氏は「私が設計すれば、ここは世界的な公園になる。完成すれば世界中から人がやってくる」と大変な自信だったと言います。確かに、イサム・ノグチ氏が目指したのは、単なる公園ではなく、大地を刻むという壮大な計画でした。アート、特に彫刻と公園という結び付きだけを考えると、安全性の問題や市民がどこまで受け入れてくれるかという課題は、常につきまといまいます。しかし、アートと公園という新たな結び付きを実現し、多くの市民がモエレ沼公園を訪れていることから、着実に前進していることは確かです。

地方財政の厳しさや公共事業の見直しのなか、芸術というもの、あるいは芸術家のこだわりを行政が受け入れていくことは、容易なことではないでしょう。また市民の理解を得ることの不安も、常につきまとうのではないのでしょうか。しかし、芸術が明日の財産として本物の都市を切り開くともいわれます。そうした意味で、モエレ沼公園は、先進的な取り組みとして札幌市が誇れる公園です。しかし、重要なのはこれを生活のなかに生きた公園としてどのように取り込んでいくかということでしょう。今後、モエレ沼公園をしっかりと支えていけるかどうかは、公園を自分たちのものとして責任を持って守り、育てていく市民の意識がさらに高まっていくことが重要ではないのでしょうか。

